

174

15

習學寮十二境記

自序



第五百奇學校を熊本城の南に肥田の地に
あり南を向つたに對し北に肥田山の秘窟に依
むま地を築ふして邸あり亭あり林あり花
あり木あり四方の遊を秋に遊く美くしく
朝夕の景色晴雨少つておろしきまゝに
夢を連てて遊んでるのり学素よりる
この樓に登りて詠見やまは山崎を望む
うして幸より十里のりくとる日め向ふ素より

花紅に柳緑ふして名所意流のありあり枕
 床の下にまねる遊鳥のさる天機に緝れ
 て何れう學の程うゝゝん此程こゝろき
 とあ物ふしてのさる文をよみ業をうらゝえ
 まゝ茲に存するぬ學の何なりとらねたに
 は身まてゝるの景色を撰て物々しく人のなき
 いざと口をくゝゝゝや一は存するておのれ
 禱る者ありおのれもあやふらるねたけふ
 もうゝゝいつゝあゝゝ成のなや月の如つ

方いさくかぬえくろに十二境の名はて先
つえいひて世の京色と記せりうの名めも
よりそにいひもてあつたりあつとてしつらみ
れ子に名つくることなきいの名あてて
て世の朝をも願みと物しつらうの中は
若め名取りのちうりうをまねか
名をとくしハうきうのつらうし人のあ
ふもとてあや